

宮城 社会

大川小と門脇小の現状把握 遺構調整会議視察

東日本大震災で被災した建築物を遺構として保存する場合の課題を整理し、調査している宮城県石巻市の震災遺構調整会議は5日、遺構候補に挙がる門脇、大川の二つの小学校を視察した。

津波などで被害を受けた施設内部を確認し、現状を把握することが目的で、調整会議のメンバー8人が参加。震災前後に市教委で学校管理を担当していたメンバーの市職員の案内を受けながら校舎を巡った。

鉄筋3階の門脇小は津波で1階が浸水。押し流された車やがれきから出火し、2、3階が火災に襲われた。大川小は鉄筋2階の校舎を上回る高さの津波にのまれ、壁などが流出した。

調整会議の会長を務める市復興政策部の堀内賢市部長は「校舎を見て、あらためて津波の怖さを感じた。震災の教訓をどうやって伝えていくかを考えつつ、検討を進めたい」と話した。

調整会議は両校舎の保存手法や維持管理費、必要な財源を調査。年内をめどに意見をまとめ、亀山紘市長に報告する。亀山市長はそれを受け、本年度中に保存の可否を判断する見通し。



被災した大川小を視察する調整会議のメンバーら

[拡大写真](#)

2015年08月06日 木曜日